

日本火山学会 編  
「富士火山」

青山 裕\*

Book Review: Fuji volcano, Edited by Shigeo ARAMAKI, Toshitsugu FUJII,  
Setsuya NAKADA and Naomichi MIYAJI

Hiroshi AOYAMA\*

富士山は誰もが知る日本を代表する活火山であり、世界各国から人々が訪れる日本随一の観光地でもある。富士山は1707年の宝永噴火を最後に顕著な表面活動は認められていないが、2000年秋に始まった低周波地震の急増を機に、改めて日本中から「活火山」としての注目を浴びることとなった。この地震活動の活発化を受けて、2001年には山体形成史や最近の噴火履歴を解明するための科学掘削が開始され、2002年からは富士山一帯を対象とした稠密地震観測が全国の大学や研究機関の協力のもとに実施された。2000年当時は私はまだ学生であったが、有珠山と三宅島が相次いで噴火し、ほぼ時期を同じくして富士山でも低周波地震活動の活発化が報告されたことで、単に仰ぎ見る山ではなく、活火山として研究対象とするべき山なのだとの認識を改めたことを覚えている。

富士山に関する一般向けの科学書籍は数多く存在するが、本書「富士火山」はそれら一般向けの書籍とは一線を画した論文集である。本書は2007年に山梨県環境科学研究所より出版された論文集の改訂版で、当初から論文集として編集されたこともあり、最新の研究成果だけを含むのではなく、専門分野外の人にも読みやすいよう配慮されたレビューも含まれている。本書には富士山に関する研究を精力的に進めてこられた研究者による29編の論文が掲載されており、その内容は地質学、岩石学、地球物理学、地球化学、水文学にとどまらず、歴史記録に基づく火山活動の検討や、土砂災害、将来の噴火を想定した防災対応まで多岐にわたる。中でも、やはり富士山の形成史や歴史時代の噴出物にスポットを当てた研究が目を引く。私にとって地質学や岩石学は専門外の分野であるが、町田先生の論文から始まる地質学的調査に関

する一連の報告は、富士山に関する地質学的研究が歩んできた歴史を網羅しているかのようである。本書に掲載された論文およびその引用文献をたどることで、富士山の形成史がとりまとめられてきた過程を读者自身で追体験できるのではなかろうか。

地質学や岩石学的研究に比べると、富士山における地球物理学的な観測研究はまだ始まったばかりと言えよう。収録されている4編の論文では、富士山の地震活動や地下構造、富士山周辺のテクトニクスに関する最新の成果が紹介されている。いずれも富士山の噴火予測を成功に導く上で重要な研究であり、地球物理学的手法による研究の現状を詳細に述べた報告となっている。中でも、地震波トモグラフィーで富士山直下の深さ7-17kmに推定された低速度域が低いVp/Vs比を持ち、その低速度域と低周波地震の発生域が重なるという結果は興味深い。

富士山は表面的に静穏な状態が続いているが、2011年3月11日に東北地方太平洋沖で発生した巨大地震の4日後に、富士山直下の深さ約15kmでM6.4の地震が発生したことは記憶に新しい。幸いなことにこれまで富士山の観測データには火山活動の活発化を示すような異常は見られないようであるが、富士山では大地震に引き続いて発生した宝永噴火の例もあり、今のタイミングで本書が出版されたことは非常に意義深い。多分野の研究を網羅し、この一冊で富士山の研究成果を概観できることは、火山研究に携わる者—特に富士山を直接研究対象としていない者—にとって、富士山を知るための良きガイドブックとなるであろう。

残念ながら本書は一般書店で入手できない。購入する場合は、火山学会事務局にFAX(03-3813-7421)もしくはe-mail(kazan@khaki.plala.or.jp)でご注文いただきたい。火山学会員には特別価格が設定されていることを最後に申し添える。

(A4版490頁、非会員価格6000円、会員価格4200円、学生会員価格2100円、2011年3月発行、ISBN978-4-9905362-0-6、日本火山学会)

\* 〒060-0810 北海道札幌市北区北10条西8丁目  
北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター

Institute of Seismology and Volcanology, Graduate School of Science, Hokkaido University, N10W8, Kita-ku, Sapporo 060-0810, Japan.  
e-mail: aoyama@uvo.sci.hokudai.ac.jp